

妖精の教室

笹峰はやお

(文藝同人誌『彩雲』11号・12号掲載)

#

目次

1.はじめに.....	1
2.物語り.....	2
3.その後の教室.....	16
4.鎧を脱いで.....	20
5.教室のその先の世界.....	22
6.ある読者からの手紙.....	25
7.最後に、妖精たちと.....	29

「妖精の教室」

笹峰はやお

1.はじめに

私がこの変てこな文書を目にしたのは、20年前の引っ越しの翌日でした。当時私は仕事を変え、とある県職員住宅の3階の3LDKに引っ越したところでした。間取りはダイニングキッチンと、8畳間と6畳間と4畳半、風呂とトイレ。たまたま単身者用の部屋に空きがなかったため、当座しのぎで家族用をあてがわれました。自分1人には広すぎる感がありました。引っ越し屋に搬入してもらったわずかな荷物を各部屋の押し入れにしまっていると、4畳半の部屋の押し入れの奥に、黒い四角いカバン様の物が残されているのに気付いたのです。引っ張り出して見ると、それは古いワープロ専用機でした。東芝製で、自分が30年ほど前に使っていたものと同じ型でした。「なんだい、前の住人の忘れ物か、やれやれ管理人さんしっかりしてくれよ。」翌日管理人に電話することにし、私はそれを部屋の隅に一時的に置き、荷物の配置を続けました。

やがて荷物の配置が終わると、なんだか手持ち無沙汰な夜がやってきました。テレビも電話もまだ引いていないし、インターネットもつなげていません。退屈しのぎに、前の住人の置いて行ったワープロでもいじって見ようかと、スイッチを入れてみました。スイッチを入れても反応が無い、もうダメかとな、と思いかけた頃に、それはモタモタと起動し、やがて狭いディスプレイに文字が現れてきました。

- ・教科教育における人間性涵養目標
- ・モチの木 of 妖精
- ・来年度新入生ガイダンス
- ・期末テスト追試問題
- ・学級通信 18号

そこにはこんな文書メニューが表示されています。どうやらこのワープロの所有者は教員だったようです。それにしても、お堅いメニューの中で2番目にある「モチの木の妖精」だけが、異質な感じがしました。私は誘惑にかられてそのタイトルにカーソルを合わせ、リターンキーを押してみました。なんだかロマンチックな秘密めいていて、胸がわくわくします。

びっしりと書かれた日記風の文章が、延々と続いています。日付が付けられているので、長期間にわたって少しずつ書きためられたものだとわかります。読んでみるとそこには、他人事とは思えない苦悶と、思いもよらない奇妙な展開が綴られていました。そこで私は、画面をスクロールして、大事だと思われる部分をつなぎ合せてみたのです。そうして出来上がったのが、この物語なのです。ここに書かれたことが空想なのか実体験なのか、私にはわかりません。

ワープロは老朽化のせいか、時折画面がフーッと暗くなります。その都度、じわじわと復旧しはするが、いつ完全に見えなくなるかわかりません。フロッピーディスクに保存を試みましたが、ディスクドライブが壊れているようです。プリンターも使えません。このままでいけば、この不思議な体験（あるいは作り話）は永遠に消えてしまうことでしょう。言い訳めいているけれどそんな事情から、この日記の断片を拾い集めて物語りとすることを、思い立った次第です。

話の舞台はどこかの実業高校で、そこは、生徒も教師もひどく荒れている学校だと書かれています。「僕」という人物は2年前にその学校に、希望せずして転勤させられて来たようです。年齢は不詳ですが、学齢前の子供が2人いるということから、およその年齢が推測できます。「僕」がこの学校に馴染めておらず、勤務を楽しんではいないことは随所に書かれており、日記は同僚教師や管理職や生徒に対する批判やののしりで埋め尽くされています。読まれる方にとっては、不愉快な記述もあるかと思いますが、あくまでもこの人物の物の見方であることをご承知おきください。

2. 物語り

4月21日（月）

今日も遅刻者が 8 名、無断欠席が 3 名、勝手に早退が 5 名。3 時限途中で社会科の川俣が授業をやめて怒鳴り込んでくる。「お前のクラスの生徒は授業態度がなっとらん、今日は特に大声で騒いで反抗するから、授業はやめた！俺はもう知らんからな、あいつらには授業はしないぞ、そのかわり期末テストはしっかりやって、出来ん奴は落とすからな！担任もっとしっかりしろ！」と吐き捨てて行った。

何言ってやがる、てめえの授業の管理くらいてめえでやれよ！自分で生徒を仕切れないからといって、担任のせいにするな！

放課後、学校のフェンス沿いをぐるっとゆっくりジョギングした。一周すると 15 分、それを 3 周した。途中からリズムに乗り、頭の中の嫌な思いが清掃できた。

4 月 25 日（金）

「板垣さん、生徒を甘やかしちゃだめだよ」と他の教師によく言われる。「この学校の生徒は牛や馬と同じだ。最初に痛い目に会わせておかないと、言うことを聞かないぞ」と彼らは言う。たしかに、大声で生徒を叱り、すぐに張り倒す教師には、生徒はおとなしく言うことを聞いているようだ。だが私は、そういう家畜扱いに頼ることはしたくない。第一に、僕は人をなぐることは大嫌いだ。第二に、自分にはそんな腕力がない。下手をすれば逆に殴られかねない。第三に、教師として機能するために、自分の本性を改造することは、魂の自殺行為だ。

5 月 1 日（木）

今日は昼休みに、繊維科の清澄から電話。「今あんたのクラスの生徒 10 数人が大挙してスリッパのまま学校外へぞろぞろ出て行った。俺が殴ってやってもよかったけど、あんたが担任だから一応知らせとくよ。」

「そうですか、わざわざご連絡ありがとうございます。わかりました、すぐ対応します」と返事して、俺ははらわたが煮えくり返ってきた。「どうぞ遠慮なくぶん殴ってやってください。先生が目撃した時にその場でぶん殴ってもらうのが一番効き目がありますから」と言ってやればよかった。本当は

ビビって何もできないくせに。

とはいえ無断外出を放っておくわけにはいかず、裏門へ急行し、物陰に隠れて彼らが帰ってくるのを待った。しばらくして、ぞろぞろと帰って来た連中を片っ端から呼び止めたが、俺のクラスの生徒はいない。機械科や繊維科の連中だ。清澄の野郎、とんでもない濡れ衣着せやがって。何か悪いことを仕出かせば、全部俺のクラスの生徒のせいにして、校内に触れ回っていやがる。

5月30日（金）

やっと悪夢の担任2か月が終わった。謹慎者4名、長期休学者1名、補導者1名。惨憺たる2年C組。全校朝礼で、私語をやめようとしないう田辺たち数名と小競り合いをして全校に恥をさらす。・・・

職員朝礼で校長が音楽の近藤先生の5月末退職を報告。校長は「年度途中に寝耳に水の自己都合退職です」と迷惑そうに言ったが、僕は驚かない。2年前一緒に赴任して以来、近藤さんは僕と二人きりの時には口癖のように言っていた。「僕は教員を辞めてフランスの美大に留学する」と。彼はがんばって、夢を実現したんだな。学校内ではワルの生徒や腕力自慢の教員たちにさんざん馬鹿にされていたけど、違う世界へ出て行くんだ。

音楽教師の彼がなんで美大に行くのかわからんが、僕は大いに共感して彼を励ましていた。「僕だって妻子がいなければ、辞めて留学して活路を開きたい。」

近藤氏はそれをついに本当にやってしまったのか…。取り残された気持ちだ。明日から6月、僕は発狂せずに生きてゆけるだろうか？ほとんどの人が帰ったあとのフェンス沿いをジョギング3周、無心になれた。途中のコースに今日もあの灰色の猫がいた。

6月9日（月）

今日放課後、いつものように校内をジョギング。機械科校舎の裏側のジャングルにさしかかると、あの猫がまたこちらを見ていた。スリムな体型のライトグレーで、両手両足の先端だけが白い短靴下を履いたように白い。しゃ

がんで静かに話しかけると、今日は碧い目をぱちくりして挨拶を返してきた。やがて向きを変えて雑草のジャングルに入って行った。

あのジャングルはいったい何だろう？中には蔦や草に覆われた気味の悪い建物が見える、着任以来それが何なのか誰も話題にしていない。

7月6日（日）

一人で日帰りドライブ、霧ヶ峰へニッコウキスゲを見に。ああ、雄大な大自然の姿はいいなあ。俺はこんなところでチマチマ生きていてはいけないのにな。

「山の子の 山を思ふがごとくにも 悲しき時は君を思へり」啄木

明日からの再びの殺伐を思うと暗くなるけど、しばし今日は夢の世界に憩わせてください。

7月18日（金）

今日で1学期が終わった。2年C組を担当してからの4か月は苦しみの連続。生徒との信頼関係は築けず、非行や愚行が多発し、高校生らしいマナーも育てられていない。1年の時の担任が音を上げて投げ出し、土木科教員の誰一人としてその後を引き受けようとしないうクラスを、それでも俺は愚痴をこぼさず、音を上げずにこれまでやってきた。本校の多くの教員は、俺がすぐに投げ出すだろうと予想（期待？）していると聞くと、俺はそんなことはしない。今日は思う存分、福住で飲んで歌った。

8月7日（木）

夏休みで全校出校日、さんざんな日、へトへト、自尊心ズタズタ、人間信頼玉砕。割り当てられた除草区域はなんと、あのジャングルだった。38人中出校したのは28人。鎌を持って働いたのは5人の生徒。あとの23人はしゃがんでくっちゃべって動かない。他のクラスがノルマを果たして帰って行くのを見て、終わってもいないのに勝手に帰ってしまった。俺と5

人だけが休む暇なく汗だくで鎌やノコギリで刈りまくって、なんとかノルマを終わらせた。ありがとう、谷中・池ノ谷・呉・黒柳・島田、おまえたちがいてくれて、どんなに助かったか。非力な担任ですまない。

ジャングルは見違えるほど普通のキャンパスの木立ちになった。

「クラスのボスを手懐けておけば、クラスは言うことを聞く」と忠告してくる教師もいる。たしかに、教師の中にはボス的生徒と「親交」を持ち、特別扱いし、便宜を与えてこちらへの協力を得ようとする者もいる。だが、たとえボスでも、導きを必要とする生徒であることに変わりはない。その生徒を教師の^{さんした}三下として使うなら、彼の学習権を奪うことになる。俺は、強圧的指導も懐柔政策も取らない。ひたすら、話してわからせようとするのみだ。だが効果はほとんど見られない。生徒にも教師にも、「もっとビシッとやらなくちゃ」と責められる。出口が全く見えない。胃が痛い。

8月11日(月)

進学希望者補習のため午前中出校。午後は明日の補習の準備。夕方日が沈む頃にジョギングで例のジャングル横を通る。相変わらず樹が生い茂って薄暗いが、下草を刈ったので、多少は安心して通れる。夏休み中で生徒がいな安心感もあり、刈った草の山の上に乗ってみる。ふかふかとして気持ちがいい。今日は涼しい風が吹いて、そこは快適な夕涼み所だ。こんな平和なひと時のプレゼントも、あるんだな～。

あの不気味な小さな平屋の建物は、原動機実習棟だと古い教員から聞いた。機械科の実習の中心が旋盤や電子回路に移ったために、手狭な原動機実習棟は使われなくなったそう。おまけにある日、若手の教員がその実習室の鴨居にロープを掛けて首つり自殺をした。その後誰かが「声が聞こえる」と言いだしてから、みんな気味悪がって近づかなくなったのだそう。

今日は恐る恐る、その棟に近づいてみた。間口が3間、奥行きが8間ほどの平屋建て。外壁や窓ガラスは蔦とコケに覆われて一面緑色になっている。入口のドアはノブまでコケに覆われている。なんだか、近づいたら祟りに遭

いそうで、怖くなって急いで離れた。以前は背丈もある草に遮られて気にならなかったが、こうして草を刈ってしまうとかえってその不気味さが際立って見えた。夜、寝床に入って目をつむると、なぜかあの緑色の実習棟が目に浮かんでくる。明日からはジョギングコースを変更しようか。

8月29日（金）

夏休みももうすぐ終わりだ。今日は学校に行って、2学期の準備をした。出席簿や学級日誌、清掃当番表や学級通信、授業の補助プリント等々。台風11号が接近していて、午後から空が曇り、東風が強くなってきた。^{ひがしかぜ}。早めに構内ジョギングに出る。これまでは機械科教室棟から右折して例のお化け棟の横を通ったが、今日からは左折するつもりだった。ところが例のネコが通路にいて、僕を見ると起き上がり、こちらを振り返りながら原動機実習棟の方へと歩いていく。「ひょっとして亡霊の使いか？」と不安だったが、無視したらその猫との縁が切れてしまいそうで、僕はついていった。

台風性の突風が時おりゴーツと木立ちをざわめかせる。猫はかまわず歩いて行き、お化け棟の前に立つやや太い木（直径20センチ）に前足を乗せると、背伸びをするように後ろ足で立ち、木の幹でガリガリとツメを研ぎはじめた。僕は怯えさせないようにゆっくりと近づいて行き、すぐ傍に立った。すると猫は「ニャン」と親しげに挨拶をした。「ニャン」と僕も応えた。すると猫は、得意そうに木の幹で再び爪研ぎを始めた。とっさに僕は猫の真似をすることにし、同じ樹の幹を両手で押さえて撫でてみた。

すると突然にもものすごい風がど〜っと吹いてきて、舞い上がった砂ぼこりで目が見えなくなった。風がおさまって目を開けると、あたりの景色が一変していた。

空は夏の夕空の薄い青に澄んでいる。うっそうとしていた雑木の林は、きちんと手入れされた庭木に変わっている。雑草のジャングルは、きれいに掃き清められたアンツーカー色の通路と、花壇に変わっている。コケと蔦に覆われていた原動機実習棟は、きれいなエンジ色のレンガと白いスレート屋根で、玄関のベージュ色の真新しい塗装の扉には銀色のノブが輝いている。入口の横には大きな鉢が幾つか置かれ、その中にはスイレンやホテイアオイが

浮き、澄んだ水の中の水草の間をメダカが涼しげに泳いでいる。不思議なことに、私はこのように一変した光景を前にして、少しも驚くことがなかった。

扉の前で猫が僕を見ながら「ニャン」となく。長いこと猫を飼ってきた習性からか、僕は反射的に猫のためにそのノブを回した。ドアはギ〜っと音を立てて開いた。

扉の向こうには、バスケットボールのコート半面ほどのガランとした空間が広がる。空気はかすかにガソリンと潤滑油の臭いがする。床は打ちっばなしのコンクリート。四方の大きな高い窓から日の光が燦々と降り注いでいる。真ん中の通路を挟んで、左右に一定間隔で4台ずつ機械が置かれている。どれも、僕が子供時代に井戸掘りや脱穀に使われていた発動機の類だ。動輪の大きさが人の身長ほどもある大型発動機から、水平式の発動機、直立式の発動機、終戦直後の原動機付き自転車、初期の自動車用4気筒エンジン、旧式の大型オートバイなど。それぞれが、なんだか生き物っぽい風貌をして鎮座している。直立式の発動機は真っ黒な制服を着た頭でっかちの小学生のランドセル姿。水平式の発動機は重労働に耐える巨大なカブトムシ。内部の機構が見えるように真っ二つに切断された自動車用エンジンは保健室の人体解剖模型のような生々しさ、旧式のキャブトンの大型オートバイは巨大なアシナガバチの風貌で油光り。部屋には作業服を着た3人の生徒がいて、一台の発動機のエンジンを分解しているところだった。入ってきた僕を見て、生徒は一瞬手を休め、「こんにちは！」と元気よく挨拶をして、また作業にかかる。

「ああ、ごくろうさん」、そんな返事を返して、僕はごく自然に部屋を横切って奥のドアを開ける。すると奥には8畳ほどの小部屋があり、ここは板張りなのでスリッパに履き替える。正面と右側の壁面には一面にドリル、ペンチ、ドライバー、ハンマー、鋸、定規などの道具が掛かっている。部屋の左側には窓に面して大きなデスクがあり、どっしりとしたアームチェアが置かれている。それは僕が長年常駐してきた教員部屋で、デスクも僕のものらしいとすぐにわかった。僕はガスコンロで湯を沸かし、コーヒー豆を挽いて淹れる。椅子にすわり、机と引き出しの感触を確かめてから、両開きの窓を押し開ける。窓の外には、コンクリートの縁石で仕切られた四角い花壇が

あり、色とりどりの花々が咲いている。きれいに整えられた植え込みの中から、季節はずれのウグイスの鳴き声も聞こえてくる。いったい、こんな世界が有るとは、他教員から聞いたこともない。自分は夢を見ているのだろうか？

そうしているうちに、耳慣れたウエストミンスターのチャイム音が鳴っているのに気がついた。そうだ、次の授業の始業の合図だ！こうしてはいられない！僕は大きく教員部屋を出て実習室を横切り、玄関の外に飛び出した。

しかし、外の様子は全く異なっていた。外では雨が横殴りに吹き付け、強風が吹き荒れ、人の気配が全くない。そうだった、今日は8月29日で夏休み、台風が接近中だったのだ。「それではあの生徒たちを早く家に帰さねば！」と思って振り向くと、そこにはくすんだ朽ちかけの実習棟が薄暗く亡霊のように建っているだけで、錆びた玄関の扉はびくともしないのだった。時計を見ると、この扉を開けた時から全く時間は経っていなかった。

9月5日（金）

2学期が始まった。相変わらず遅刻・欠席・早退・校舎破損・けんか・反抗・盗み・なんでも起こる。だが、この学校で最も荒れているのは、生徒じゃない、教員だと俺は気づいた。この学校の生徒が荒れている本当の原因は、いいかげんな教師たちだ。

2学期が始まってから、息つく暇もない忙しさと、構内ジョギングに出かける余裕がない。猫にも、不思議な教室にも、会えない。

9月17日（水）

今日は生徒に本気でぶつかった。背水の陣だった。体育大会の日で、担任が生徒をねぎらうために、購買からクラス人数分のジュースを買ってふるまうのが、学校で習慣となっている。僕もそれにならい、級長と副級長に金を渡してジュースを人数分買って、教室に運ばせておいた。

ところが、帰りのホームルームに行ってみると、ジュースが無いという生徒が4人いるではないか。購買のレシートには、たしかに38本と書いてあ

る。空き瓶は 38 本ある。俺は教壇に立ち、「どうして足りなくなったのか、知っている者がいるはずだ。申し出てほしい」とクラスに言った。緊迫した雰囲気張り詰める。誰も申し出ない。「ジュース一本は安いものだ。しかし、これは権利の侵害で、ことは重大だ。自分のジュースを飲まれた者の悔しさを考えてみろ。自分だけ得をして他人に犠牲を押し付けることは許さない。」俺は勇気を振り絞って言った。すると大久保が「遅く来る奴が悪いだらあ」と言ったので、俺はすかさず言った。「この 4 人は、生徒会の委員として、体育大会の器具の片づけをしていたから、戻るのが遅くなったんだ。それがみんなのために働いてきた者に対する扱いか？」

これまでも、クラスの勝手な連中が善良な者たちを食い物にする事件が続いていたが、証拠がなかった。今日は証拠がある。俺の中にこれまでにない巨大な怒りが湧き起こってきた。今日は絶対に妥協しないと心に決めて、俺は言った。「4 人のジュースを飲んだ者が申し出るまで、お前たちを帰さない。明日の朝までこのままだ。」

10 分経ち、20 分経ち、30 分経ち、他のクラスは全部帰ってしまった。俺は生徒の前に仁王立ちに立って、睨み付け続けた。たとえ生徒に踏み倒されても、仁王立ちを続けるつもりだった。1 時間くらい経った頃に、大久保が「わかったよ、俺が飲んだ」と白状した。それに続けてあと 3 人が白状した。「よく言った。それで俺は納得した」、そう言って、生徒を帰した。ジュースを飲まれた 4 人には、ジュース代を渡した。今日ほどスカッとしたことはない。

9 月 19 日 (金)

今日ジョギング中、またあの猫が現れた。その猫について行って、実習棟前の爪を研ぐ樹(たぶんモチの木)を見ると、地上 1 メートルくらいの所が磨かれたようにツルツルしている。それで、前回のように、自分も猫の真似をしてその幹を両手でさすったら、前と同じようにドーっと風が吹き、ほこりが舞い上がり、あたりが幻の原動機実習棟に変わっていた。入り方がわかった！うれしい。

実習室では、今日もあの 3 人の生徒が発動機の整備をしていた。今日は、

一番大きな発動機を試運転する日だった。僕はこのような大型発動機を学生時代に見たことがある。名古屋港の貨物船内で荷揚げの日雇いアルバイトをした時だ。船倉の底から大きな網に乗せて、積み荷を引き揚げるのに使われていた。ドッドッドと地響きのするエンジン音を響かせて、ガラガラと歯車を回転させて働いている、巨大なヒグマみたいな逞しい機械は、実に魅力的だった。

3人の生徒が力を合わせて、直径が人の背ほどある巨大な鑄鉄のはずみ車の取っ手を掴んで回し、十分に回転が出たら、クラッチを入れてはずみ車の力をピストンに伝える。すると、プシュッパ、プシュッパ、プシュッパと漏れるような音がして、やがてドクン、ドクン、ドクンという音に変わり、こんどはドッドッドという地響きに移ってゆく。すると実習室の床や壁や窓が、一緒になって響きだす。排ガスのにおいが工事現場の元気を運んでくる。

それを見届けてから奥の教員部屋に入って、書き物をしていると、生徒が「先生、掃除に来ました」と入ってくる。3人で手際よく床を掃き、壁の道具を磨き、机の上を拭いていく。「君たちえらいな～。誰もサボることなく、自発的に掃除してくれて。僕のもう一つの学校では、掃除をサボる者が多くて、まじめな生徒がかわいそうだよ」と言うと、中の1人（ノエル）が「先生、僕たち掃除が好きなんです、監督の先生が見ていなくても、好きだからやるんです」と言ってほほ笑んだ。

「ここの生徒は、君たち3人だけなの？君たちはどういう生徒なの？」と僕は聞いてみた。

「去年まで5人いました。今は3人です。僕たちは、昼間の学校で登校できなくなったり、病んでしまった生徒の、行き場をなくした情念なんです」ともう一人（ラルゴ）が答えた。「僕たちは、何らかの事情で叶わなかった、高校生の夢の妖精です、ここは妖精の学校なんです。」

「そしてここは、何らかの事情で、教師の信念を叶えられなくなった先生の、情念の学校でもあるんです」と別の生徒（ミモザ）が言った。「私、先生を連れに行った、あの猫なんです」とミモザは言ってクスッと笑った。そういえば、細身のしなやかな肢体や顎のあたりが、あの灰色の猫に似ている。

「そうっか、そうだったのか、ありがとう、ミモザ。よろしく、ノエルとラルゴ」、私は答えた。これからは来たい時にこちらの学校に寄ることができる、そう思うと、心が幾分軽くなった。

9月24日（水）

おとといから、僕は幻の学校の花壇に水を撒いている。おとといミモザがやってきて、翌日からしばらく入院するので、代わりに花壇の水やりを頼まれたのだ。「妖精も入院することがあるの？」と聞くと、「はい、妖精も病気になります」と答える。そういえば顔色が悪く元気がない。「そうか、わかった、水やりは引き受けた。お大事にね」と言うと、うれしそうにお礼を言う。「水やり、毎日お願いします、今は日照りが強いから。それから先生、花壇に出る時は、裏のドアから出てくださいね」、ミモザはそう言い残して早退していった。

小さな裏口が、僕のデスクの右側の壁面に有るのに気が付いた。裏口を開けて外に出ると、なるほどそこから出た時は、風景が一変するようなことがない。

水道の蛇口をひねり、渴いた花壇に水をやる。花壇の真ん中には、小さな円柱の礎石の上に、40センチほどの大理石様の白い彫像が立つ。水瓶を小脇にかかえた少女の像だ。それを取り囲むように赤い花の帯があり、その外側に丈の低いピンクの花の帯、さらにその外側に紫と白の花の帯、そして一番外側は緑色の葉っぱの縁取りが植えられている。

まだ9月、暑い太陽に焼かれて水やりなんて面倒だな、と当初は思っていた。だが水やり3日目になって、なんだか草花が可愛く思えてきた。一つ一つの花が、語りかけてくるような気がする。花の息吹が僕の渴いた胸の中に入ってくるようだ。そして、最初は見えていなかったものが、見えてくるようになった。花壇の後部には、大きな葉っぱのカンナが横並びに植えられて、白い大きな花を咲かせているし、その前には青い小さい袋のような花をいっぱい付けたノボリフジが一行に植わっている。

9月26日（金）

今日は朝の登校指導の当番日、いやな日だった。朝、8時から9時まで、当番の教員が6人ずつ、正門と裏門で登校する生徒をチェックする。生徒指導部の教員を中心に生徒の服装や持ち物に目を光らせ、まるで工場の製品検査みたいに、不備が有る生徒を片っ端から門の脇に集めて検査するのだ。こんな検査をこの学校は毎日行っている。頭髪を染めた生徒や、眉を剃った生徒、スカートの短い生徒、サンダルを履いた生徒など、次々とひっかかる。大声で生徒をどやしつける教員の声が聞こえる。「直してから学校へ来い」と入校を拒否されて、「っせいバカヤロー、知るケー！」と怒鳴って帰って行く生徒がいる。学校全体が取締り中心の体質を強めると、取締りの上手さを競う風潮が教員集団に出てくる。そうやって取締りはエスカレートする。

8時40分、始業のチャイムが鳴ると、門番の教員たちは門の鉄扉を閉める。今度は遅刻取締りが加わる。閉まっていく扉をすり抜けようとして突進してくる自転車がいる。どこかの高校で、こういう時強引に鉄扉を閉めたため、すり抜けようとした女生徒が鉄扉に頭を割られて死んだ事件があった。うちの学校でも起こりかねない危ないやり方だ。

今朝は僕の担任する生徒が5名も、この登校時指導でひっかかった。頭髪のパーマ、髪染め、そり込み。1人は運動靴のかかとを踏んでいるということまで止められた。こうなると教員の恣意的な言いがかりに近い。指導部の、僕に対する嫌がらせか？

僕は前からこのやり方にはっきりと反対している。「担任は、服装を話のきっかけとして、1人1人の生徒に物事の道理をわからせるように対話して指導するべきだ。そういう白兵戦での話し合いを逃げておいて、まるで生産ラインで不良品検査をするような機械的な手は、教育ではない。」しかしこんなことを言う教員は少数派だ。「おまえの取り締まりが手ぬるいから、全校が一致して指導できないのだ」と逆に非難される。

だが正門の前で、こんな議論をするほどの根性は僕にはない。仕方がないので、離れて校門の脇に立ち、登校する生徒に「おはよう」と声をかけるだけだ。いやな時間はなかなか過ぎない。ああ、早く妖精の学校に行きたい。

10月13日（月）

妖精の学校ではミモザが治って出てきていた。「ミモザ、お帰り！」と言うと、「先生、会いたかった～」とかけ寄って来る。どうして自分はこちらの学校ではこんなにすなおになれるのだろうか？

「先生、お花に水やってくれてありがとう！おかげでみんなとっても元気ね！それに、雑草も取ってくれたでしょう。」

「そうだよ、ついでに、花壇に咲く花の名前も覚えたんだ。」

「え～っ、すごい！先生、言ってみて。」

「奥の花からいくよ、あの大きな花はカンナ、その手前はルピナス、像の回りがサルビア、その左右の広がりは日日草、その外側の白と紫はペチュニア、そうして縁取りはタマスダレ。」

「正解！ところで先生、前からだいぶ変わったね！」

「どう変わった？」

「前より目がやさしくなった。」

そう言われて、たしかに自分も変わったなと思う。表^{おもて}の教室でどんなに困っても、それが全てではない自分がある。

「ミモザ、僕はこれからも花壇に水をやっていいかい？」

「はい、お願いします」、ミモザは嬉しそうに答えた。

10月24日（金）

最近、表^{おもて}の学校内をジョギングする時、原動機実習棟の前のゴミの山が気になってきていた。幻の学校では、美しい彫像が立ち綺麗な花が咲く花壇のはずなのに、こちらでは枯草が小山のように積まれている。そう思ったら、この花壇がかわいそうになった。先週から、授業の合間にリヤカーを持ち出して、ゴミの山を少しずつ別の場所に移している。今日までにリヤカー4杯分のゴミを除去すると、花壇の縁石が現れてきた。彫像も、半分埋もれた土の中から救出した。ただし、左腕が折れてなくなっている。折れた腕は周辺の土の中にみつかった。機械科の黒釜さんに相談して、腕に鉄芯を入れてセメントで固める修理をしてもらっている。

十何年ぶりかに日の目を見た花壇、花は絶えただろうと思っていたら、縁石の周りのタマスダレが数本、ゴミの上に葉を出して細々と生き延びていた。

もう花の時期は過ぎたが、来年に向けて土を耕し肥料を入れ、花壇の準備を始めるつもりだ。周りの教員は、またあの変人が何か始めたど、あきれ顔で見ているだろうな。

10月30日（木）

今週は表^{おもて}の学校は中間テスト期間だ。生徒はさっさと下校し、テスト期間中に悪さをする生徒も少ないので、精神的に楽だ。今日の午後は、妖精の教室に寄ってみる。あのモチの木の幹は、僕がこするだけであんなにスベスベになるものだろうか、ちょっと気になる。

いつものようにその幹をこすって妖精の世界に入り、原動機実習棟の私のデスクに座ってしばしくつろぐ。窓から見えるモチやカエデが色づきはじめている。花壇では鶏頭が赤いカーペットを成し、その傍らでコスモスが風に揺れている。

「先生、僕たちに英語を教えてください」とノエルが呼びに来る。そういえば、英語の教師なのに、ここの生徒たちにまだ英語の授業を始めていなかった。生徒たちを教員部屋に呼び寄せ、丸テーブルを囲んで4人で座る。

「この本で勉強したいんですが」とノエルが差し出したのは、*The Man Who Planted Trees*、ジャン・ジオノの「木を植えた男」の英語版だ。「なるほど、いい本を選んだね」僕は感心した。森林破壊で一面の荒野となった原野に、人知れずブナの種を植えて育て、豊かな森を再生してゆく孤高の人の物語である。さっそく、輪読会の形式で、物語を読みとり、音読してゆくことにした。とても楽しい授業だった。

3月2日（月）

今日は、表^{おもて}の学校の卒業式。今年の3年生の5クラスのうち、2クラスは僕も授業を担当していた。卒業式に着席する3年生を見ると、いろいろあったが立派に成長したなど感じる。式が終わり、卒業生は教室に入って担任から卒業証書を受け取る。担任がはなむけの挨拶をして、生徒を送り出す。すぐには去りがたい生徒たちは、思い思いに、教わった先生を訪ねて挨拶したり、部活動で後輩の祝福を受けたりして過ごす。

卒業生を担当していない僕は、生徒が挨拶にやってくることは期待していなかったが、それでも授業で教えた生徒がちらほらと挨拶に寄ってくれた。そうやって訪ねて来た卒業生の中に、ミモザをみつけて、僕は驚いた。「えっ！ミモザ、君もいたのか！」

妖精の教室のことは、表^{おもて}の学校では秘密なので、言葉に気をつけながら僕は答えた。

「いやだわ、先生、わたし最初からいましたよ。でも先生なかなか気づいてくれなかったみたい」、ミモザは微笑みながら答えた。

「そうだったのか〜。え、ミモザ、いなくなっちゃうのか。そうか〜。でもおめでとう！みんなおめでとう！」

僕は、わけがわからなくなかったが、それはどうでもよいことに思えた。ただひとつ、ミモザたちが僕を励まし、育ててくれたことだけは、よくわかった。僕はそのお礼を目でミモザに伝え、ミモザも目で応えた。

「先生、これからも、ノエルやラルゴや後輩たちのこと、よろしくお願ひします」、ミモザはそう言うと、深く一礼して明るく職員室を出て行った。

以上が、あのワープロに残っていた奇妙な日記の前半の抜粋です。まだまだ日記はこの先へと続いているのですが、ワープロ画面がとても見づらく、パソコンに打ち込むのも大変なので、まずはここで一区切りとします。

宿舎の管理人に問い合わせましたが、ワープロの持ち主は、結局わからずじまいでした。機器の古さからして、たぶん何代も前の住人の物だったのでしょう。あの話が、どこの学校をモデルにしたものなのかも、遡って突きとめるすべはありません。この妖精の教室の話がフィクションであろうと、ノン・フィクションであろうと、公表して誰かに迷惑をかけることはありそうもないので、ここに紹介することにしました。

3.その後の教室

このようにして、私は引っ越し先の官舎に残された古いワープロの日記の断片を拾い集め、一編の物語にしました。そしてそれを同人誌『冬芽^{とうが}』十六号に投稿しました。これをやり了えた時は、なんだか身寄りのない仏を弔ったような安堵を覚えたものでした。

書き終えて、いろいろな疑問が頭に残りました。あんな教室が本当にあるのかという疑問は、もちろんです。少なくとも書いた本人にとって、あの教室が大きな意味を持っていたことは確かです。それにしても、あんなに物分りが良い生徒たちが、なぜ現実界の学校に行けなくなってしまったのか？あの教室は、どこの学校をモデルにしたものなのか？そしてなぜ妖精の教室は1棟・1教室だけなのか？あの教師と妖精たちは、その後どうなったのか？

日記の作者名は不明ですが、名前無しでは執筆上困るので、仮に彼をY先生と呼ぶことにします。3月2日の卒業式以後もY先生の日記は続いていました。そこには、妖精の教室から更に先へと続く入口や、教室の裏庭の苗木畑、新たに転入してきた生徒の話などが記されています。そして、Y先生の生徒に対する姿勢には、徐々に変化が見られました。そして、そのきっかけとなったのは、どうやら先生自身の家庭内の不和でした。

四月の日記にはこう記されています：

「ああもうたまらん。神様助けて。妻と結婚して以来、お互いの物の考えや感じ方の違いを日々に思い知らされる毎日だ。何気ないテレビを見て発するひと言から、一気に不機嫌が家の中を支配する。相手のちょっとしたしぐさや言葉の端が、自分に対する敵対に思われて、「自分は嫌われている」「この人は本当は私を愛していない」といった疑心暗鬼が始まる。

子供が生まれたら、夫婦の絆はもっと安定するだろうと期待していた。しかし、それは誤りだった。妻は増加した日々のストレスを俺にぶつけ、ますます不機嫌をエスカレートしてくる。俺は、妻らしい優しさの欠けらも無くしてしまった相手に、ますます反感を募らせる。こんな狭い部屋で、お互いを憎みながら同居する毎日は本当に苦痛だ。しかも、官舎の隣人はみな同じ職場に勤める同業者ゆえ、仲の良い仮面夫婦を演じなければならず、誰にも本当の悩みを相談できない。教員たちはみんな、「自分の家庭には何の問題も無い」といった聖人のような顔をしている。だから、俺はこの悩みを誰にも打ち明けることができない。」

Y先生は以前から時々、日記で奥さんとの不仲に言及していましたが、そ

れが徐々にひどくなり、互いに一切口をきかない家庭内離婚の状態に陥っていったようです。官舎の3LDKの家で、Y先生は東側の6畳間、奥さんは西側の4畳半、二人の子供さんたちがその間のリビングとダイニングキッチンを行き来するという、息苦しい状態に陥っていました。そのおかげで、皮肉にも荒廃した勤務先の学校にいる方が、奥さんのいる険悪な家よりも、相対的に心安らぐところとなってしまったのです。

翌4月からY先生は土木科のクラスを持ちあがり、三年生の担任となりました。クラス替えはなく、前年と同じ生徒の担任でした。相変わらず生徒は言うことを聞かず、服装や態度は悪く、清掃サボり、喧嘩や喫煙、補導や愚行が多発していました。その頃の日本経済は未曾有の好景気まっただ中で、通知表が1と2ばかりで、年間の遅刻・欠席・早退回数が40～50回を超えていても、就職試験に行けばおみやげ付きで合格になる時代でした。

Y先生は、木枯らし吹きすさぶ冷え切った家庭での沈黙に耐え切れず、ともかく学校に来て生徒と口をきくのが救いになりました。大半の生徒とは会話は成立なくても、自分と普通に会話をしてくれる生徒が少しはいたのです。これまで、大きな態度や声で目立つリーダー的なワルばかりに注意を向けてきたY先生の視点が、変わっていきました。

五月の日記には次のような書き込みがあります：

「最近清掃や廊下の立ち話で、少数だが僕と話しをしてくれる生徒がいる。今日は飯田らと話していて、「タッチ」というマンガが人気だと聞き、本屋に行って読んでみた。なんと、大人が読んでも面白い、心に響く野球少年の物語だ。小原田実里が「ビリー・ジョエル」というロック歌手を僕に勧めてくれたので、これをレンタルショップで借りて聞いてみた。ただ喧しいだけだろうと思っていたが、実はしっとりとした曲もあることがわかった。次はこのアルバムにある **Honesty** という曲を授業で取り上げてみよう。」

以前のY先生なら、清掃時にサボって帰ってしまう生徒への憤りで心が真っ暗になったものでした。ところが今の彼は、サボらずに清掃をやっていく少数の生徒と共に居ることを喜ぶようになり、おかげで学校がなおさら居心

地のいい場所となっていました。

教師たちの、Y先生に対する白眼視は相変わらず続いていたけれども、そんな状況に耐えかねた時は妖精の教室に入って、英語を教え、原動機をいじり、庭に出て草花の世話をしました。

同じく5月の日記には次のような書き込みがあります：

「もともと自分は草花に関心はなかった。食用にも学問にもならず、すぐに枯れてしまう草花などに関わるのは時間のムダだと思っていた。前年に妖精のミモザに頼まれて、花壇に水をやったのをきっかけに、世話を続ける羽目になった。始めは単なる義務としてこなしていたが、続けるうちに少しずつ草花がいとおしく思えてきた。夏の間、ぐったりとしていたゼラニウムも、秋になるとふさふさした紅い花をびっしりと咲かせてくれた。花壇の縁沿いに生えているタマスダレは、単なる雑草だと思っていたが、ある日一斉に白い花のベルトで花園を縁取ってくれた。水をやりながら、俺は一つ一つの花が自分に語りかけてくるのが聞こえるようになった。『虫に樹液を吸われているから助けて』とか、『株が密集しすぎて苦しい』という訴えや、『きれいに咲きました、ありがとう』といった喜びの声も。」

日記のトーンは、教師として「悪い」生徒の前に立ちはだかって屈服させようとする取締りの路線を離れ、自分なりのアプローチを歩みはじめました：

「この学校の教師も生徒も、周りの者に舐められることを極度に恐れる脅迫観念に憑りつかれている。舐められまいとして、教員は頭が切れ・揺るがない確信を持ち・家庭が順風満帆なフリを必死に演じている。生徒は生徒で腕っぷしが強く・押しが強く・悪^{ワル}のフリを演じている。だが俺は、そうしたフリ^{フリ}の競争からはもう降りることにした。」

こうした心境の変化につれて、生徒と心が通う体験も描かれるようになりました。7月の日記には次のような記述があります：

「今日は十月の就職試験に備えて、生徒に就職の面接練習を行った。進路

希望を澄田に聞いたところ、福祉関係の専門学校に進みたいと言う。澄田はおとなしいがまじめな努力家だから、地元の一流企業の技術職として合格は間違いないのに、なぜ畑違いの専門学校に進みたいのか？聞けば、『僕には障がい者の兄がいます。兄は小児麻痺で、歩くこともしゃべることも自由にできません。兄のような人を助けたいので、福祉の道に進みたいと思います』と答えた。俺は感心した。高校生の頃、俺には彼のような信念は無かった。周りが大学に行くから自分もとりあえず行こうという発想しかなかった。

俺は、今まで 35 年間、勉強のできない生徒は、怠けものでワンランク下の人間だと思い込んできた。だが今目の前にいる生徒は、17 歳の頃の俺よりもはるかに立派な人間だ。教師として、勉強ができない連中は人格的に一歩劣る人間だという先入観を、頭では否定しても、心では払拭できなかった。だから今まで俺は、彼らとうまくゆかなかったのかもしれない。この学校に来てだんだん、生徒の中にある深い思慮や優しさが見えるようになってきた。どの生徒も、どこかで俺よりも立派な面を持っていることを、思い知らされてきた。」

4. 鎧を脱いで

こうして鎧を脱いだ Y 先生は、取り締まる教師から人間としての教師に変わっていきました。9 月の日記に次のような記述があります：

「建築科 2 年のクラス担任が俺に、受け持ちの生徒と話してやってくれと頼んできた。浜島という生徒で、担任がどんなに説得しても、学校を辞めると言って聞かないという。『辞める前にもう一人の先生の話も聞いてみる』と言ったところ、『Y 先生となら話してもいい』と答えたとのこと。浜島は俺も授業で教えていて知っているから、面談を引き受けた。

放課後に浜島と会って四十分くらい話を聞いた。彼は、建築科の教員たちにヘドが出るほど嫌悪感を持っていると言う。『先生たちは威張り散らして生徒の心を踏みにじっている。もうこれ以上我慢できない。二週間かけて徹夜同然で書き上げた製図を、たった 5 分間締切に遅れたという理由で受取りを拒否し、窓から投げ捨てる教員や、機嫌が悪いと生徒に難癖をつけ、容貌まで話にあげて侮辱する教員がいる。職員室にいる他の教員たちは、そう

いう横暴が行われているのを見て見ぬふりしている。これまで一年半我慢して来たが、そういう教員をぶん殴りたい衝動が増すばかりだ。本当にぶん殴ってしまう前に、学校を辞めたい』と言う。

建築科の教員の生徒いじめは、俺も以前からよく話に聞いている。浜島の話聞きながら、俺の頭の中に、まるでどこかから降ってきたみたいに、はっきりと言葉が浮かんできた。

『俺も、そういう教員はぶん殴りたいくらいに腹が立つよ。』

浜島は意外な反応に驚いて顔を上げた。俺は続けた、

『浜島君、君がこの学校に進学を決めた訳を話してくれ』

『・・・僕の家は母子家庭で、小学生の弟と中学生の妹がいます。僕は建築士になりたかったけど、パートでへとへとになって働く母を見て、とても大学へ行きたいとは言えませんでした。中学の担任から、工業高校の建築科を出て実務経験を積んで、試験を受けたら建築士になれると聞いたんです。』

『なるほど、それは、どれくらい実務経験を積みばいいのかな？』

『設計部門で三年です。そうしたら二級建築士の国家試験が受験できるんです。』

『そうなのか、素晴らしい夢じゃないか。君はどんな建物を設計したいんだい？』

『個人住宅です。家族が仲良く暮らせるような、温かい。そして小さくても子供と遊べる庭がある。夜には、窓からもれる明かりが、外を通る人の心を暖めるような。』

そう話す浜島の顔は、夢に輝いていた。

『浜島君、その夢をまっしぐらに追いかけたらいいじゃないか。大きな夢を追いかける人は、道端で絡んでくるチンピラなんかに関わっている暇はないよ。』

その時、浜島の頭の中に、ひらめきが駆け巡ったのが見えた。

『腹が立ったら、その怒りのエネルギーを勉強に向けて、これでもか！これでもか！と必死に勉強して、夢を叶えるんだ。立派になったらこの学校を訪れて、奴らに見せつけてやったらいい。』

浜島は猛烈にやる気を出して、『ありがとうございます！』と元気よく

礼を言って帰って行った。彼に言ったその言葉は、自分に言った言葉でもあった。

5.教室のその先の世界

一方、日記の中の妖精の教室も、新たな場所へつながりました。当初は教室が一つと、隣接する準備室、その前の庭だけが描かれていましたが、そこから次の場所へと続く入口が開かれていきます。九月の日記には次のような書き込みがあります：

「久しぶりに妖精の教室のデスクに向かっている。最近では現実の学校で生徒と話し込むことが増えて、なかなかこちらで過ごす時がない。ただ、職員室の喧騒がイヤになって、そんな時にはここへ来て自分の勉強をしている。

今日、勉強を一区切りして顔を上げると、向かい側のドアの外の景色が見えた。何気なく見ているうちに、おや？と気がついた。あの北側の壁には、ドアなんか無かったはずだ。壁一面に釘が打たれ、ノコギリや、やっところ、ペンチなどが掛けられていたはずだ。ところが今見ると、その壁の左隅にドアが有り、その上三分の一には透明ガラスがはまっている。

俺は、生徒のノエルを呼んで聞いてみた。『ノエル、今日この壁に、突然ドアが開いたんだけど、いったいどうなってるんだろうか？このドアを開けたら、何が起こるんだろうか？』

『先生、妖精の教室には、ドアや通路がたくさんあるんです。そのそれぞれが、新しい空間へとつながっているんです。』

『そういうものが有ったとしたら、なぜ昨日まで僕に見えなかったのだろうか？』

『最初から見えることはありません。また、誰にでも見えるというわけでもありません。そのドアは、先生にとって意味を持つようになったから、今はじめてそこに現れたんです。妖精の教室には独自の空間が随所に広がっていると聞いていますが、僕にとっても、見える空間はその一部でしかありません。そして僕に見える空間が、他の人に見えるとはかぎりません。この教室にいるそれぞれの人にとって、ちがった空間が広がっているのです。』

『わかった、ノエル。僕はそのドアを開けて向こうに出てみようと思うんだが、大丈夫かね？』

『もちろんです、先生。大丈夫だから、今先生の前に出現したのです。』

俺はその小さなドアのガラス越しに、向こうの世界を覗いて見た。慣れ親しんだ南側の花の庭とはちがって、一面に緑の畑が広がっている。どうやら大丈夫そうなので、ドアを開けて北の庭に出てみた。なだらかに波打つ芝土が遠くまで広がり、その上にいろいろな高さの苗木がたくさん植わっている。その一本一本は独特の樹形をしていて、根元には小さな白い札が付いている。値札かと思って手に取って見ると、そうではない。書かれているのは、『建設技師になってダムを建設する夢』とか、『ジョージタウン大学へ留学する夢』、『妙高の笹ヶ峰に山小屋を建てる夢』、『あこがれの乙女のブロンズ彫刻を作って美術展に出典する』とか、『森の樹上にツリーハウスのカフェを開く夢』とか書かれている。『まるで七夕の短冊の願い事みたいだな』と幼稚さに笑いかけたが、なんだか見たことのある文言だな、と思いつつ眺めていくと、『多美子と二人で白馬村にログハウスを建てる夢』という札を見て符牒が合った。多美子は、俺の妻の名で、短冊に書かれていたのは、俺が昔描いた夢だった。すっかり忘れ去ってしまった夢たちが、ここで苗木のまま生きながらえていたのだ。ここに広がる苗木の畑は、我々が中途まで追い求めて放棄した夢や憧れが眠る庭だったのだ。夢たちは滅びてしまったのではなく、夢の持ち主が迎えに来るのをこうして待っているのだ。」

また、新たな通路は生徒のロッカー扉の向こうにもひろがっていました。Y先生は、教室の壁際に置かれた生徒のロッカーの中にそれを見つけたのです。ある日彼はノエルに参考書を渡そうと探していて、ノエルがロッカーを開けて中に入るところを偶然に見かけました：

10月15日

「ノエルがおかしな所に入っていくのを見て、俺はそのロッカーを開けてみた。すると扉の中には通路が伸びていて、奥から光が射し風が吹いてくる。通路の先は、碧い海原を見渡す海岸のカフェだった。その先端は海にせり出

したテラスになっており、腰までの高さの柵沿いに、白いテーブルと椅子席が並んでいる。海の風がサァーッと吹いて、その風の中を海鳥がふんわりと浮いている。壁の下は二百メートルほどの断崖で、はるか下に白く泡立つ磯が見える。

カフェの横に、海に向かって傾いて突き出す板敷があり、その上で数人の若者が風を待ち受けている。インストラクターらしき女性が白と赤の旗を大きく左右に振ると、先頭の若者がバーを握って滑走路を駆け下りる。滑走路の先端で若者が思い切りよく踏み切ると、足が空中に浮き、ハングライダーが風に乗って空を滑り出す。『これがノエルの夢の世界なのだ、素敵だな』と思った。」

10月には、別の生徒、ミリアンの世界への入口が描かれています：

「転入生のミリアンは硬い殻に閉じこもっていて、級友にも俺にも心を開かない。今日俺は、ミリアンを心配するアミュと一緒に、後をつけてミリアンのロッカーの向こうを覗いてみた。ミリアンは、教室らしい部屋に十五人ほどの子供たちと一緒にいた。それは、屋根と床だけしかない、粗末な教室だったが、見違えるような明るい元気な声を張り上げて、どこかの国の童謡を歌って聞かせている。子供たちは歌いながらぴょんぴょん跳ねてミリアンの周りをまわっている。やがてミリアンが踊りながら教室の外へ出ると、子供たちは列になってその後を踊りながら連いてゆく。外は赤い土の庭で、ニワトリや山羊や子ブタが歩きまわっている。その動物たちをびっくりさせながら、ミリアンの踊りの列は川べりの林へ進み、涼しげな木陰の草に腰を下ろす。ミリアンは小さな黒板を木の枝に掛け、アルファベットの授業を始める。ミリアンが『A is a a a a apple』と言うと、子供たちが大きな声で『A is a a a a apple』とくり返す。俺はそれを見ながら心の中で言った、『ミリアン、それが本当のおまえなんだね。その姿を大切にね。』

ワープロの書込みは、それが最後でした。私がそこまでたどり着くのを見届けたかのように、ほどなくワープロは一切の動きを止め、反応しなくなりました。

物好きにも私は、この日記を書いたY先生と妖精の教室に興味湧き、県下に工業高校が幾つあるかを調べてみました。その結果、12校あることがわかりました。その中で、機械科を持っている高校が9校ありました。調べられない数ではない。私は暇を見つけては、地域探訪を兼ねてこの9校を訪ね歩きました。学校の周囲のフェンス際を回り、木立ちに囲まれた苔むした平屋の建物（原動機実習室）が有りはしないかと偵察して歩いたのです。しかし、そのような所は一か所も見つかりませんでした。やがて10月に入って私の仕事が繁忙期となり、日記のこともY先生のこともすっかり忘れてしまいました。

6.ある読者からの手紙

私はある国立大学の事務職員をしていて、3年前からは入試係長を務めています。これは人がなかなかやりたがらない激務です。11月と12月の本学2回の推薦入試を皮切りに、1月にはセンター試験の会場校として5,000人規模の受験生を受け入れ、更に2月の前期試験、3月の後期試験と、合計6回もの入試を実施しなければなりません。教員と事務職員が合同で入試委員会を組織し、その指揮のもと、1,000人以上の教職員が問題作成、試験準備、試験監督と採点にあたります。生徒の人生を左右する重大な入試ですから、間違いは一つも許されません。1つの作業を、複数の者が目を通し、他の業務の数倍の注意と手間をかけて業務を行うのです。

実は半年ほど前から、胸のあたりに違和感があるのを感じていました。喉とみぞおちの中間あたりの、圧迫されるような違和感でした。気にはなりましたが、繁忙期に入った入試業務を毎日追いかけるのに精一杯で、医者にかかることをしませんでした。

ようやく4月5日に全部の入試業務を終了し、内輪の委員で打ち上げをし、深夜に帰宅して寝ていたら突然胸が激痛に襲われ、吐血しました。救急車で運ばれて県の医療センターに緊急入院し、食道癌の3期と宣告されました。治療の進歩により、癌はもはや不治の病ではなくなったとはいえ、長期間治療に専念する必要が有ると言われ、5月から仕事を休職しています。

それ以後は、10日ほどの入院をして抗がん剤投与を受け、それから退院

して1か月ほど自宅療養をするというサイクルを繰り返し、これで3サイクル目になります。抗がん剤投与中は悪寒と吐き気に襲われ、身の置き所が無いくらいに苦しい。だがおかげで、ゴルフボール大だった癌組織は、そら豆大に縮小して痛みもほとんど無くなってきました。もう一回抗がん剤を投与したら、手術して癌を摘出するとのことでした。

そんなこんなで自宅療養中の8月のある日、見知らぬ人から一通の封書が届きました。発信人には「只埜きよし」とだけ書いてあります。封を開けると、そこにはワープロ打ちの長い手紙が入っていました。

「拝啓、立春の候、貴殿様にはますますご健勝のこととご拝察申し上げます。突然お便りをさしあげることをお許しください。私は先日立ち寄った書店で、『冬芽』という同人誌を見つけ、手に取ってみました。その中の『妖精の教室』という一篇に興味を引かれ、中をのぞいてみました。読み始めてだんだん、ある予感に胸が高まってゆきました。震える手でその本を買って家に帰り、一気に読み通しました。驚いたことにそれは、昔私がワープロに書き記していた日記と、大変によく似ていたのです。」

なんとその手紙の主の只埜きよし氏は、私が仮に「Y先生」と名づけた、あの日記の作者だということです。寝そべっていたベッドから起き上がって、私は肘掛け椅子にきちんと座り直して、その先を読みました。

「たぶん、あの小説に出て来るワープロは、私が官舎に置き忘れたものです。あの日記を書いていた頃は、私の人生で最も苦しい時代でした。勤務する学校は荒廃しきっており、腕力と暴力と暴言が支配していました。気の弱い私は、そういうボスの教師や管理職から強圧的指導に加担を迫られ、生徒のワルからは反発され憎まれていました。『自分はここにいたら、3年のうちに精神をやられるか、内臓をやられるか、どちらかだろう』と覚悟していたものです。

家に帰れば、妻との不仲が暗雲のように垂れ込めていました。そしてとうとう6年前、私たちは別居という道を選びました。身も心もボロボロで、自

暴自棄で家具を処分し、荷物をトラックに載せて、官舎を後にしました。そのどさくさの中で、あのワープロは行方不明になりました。それに気づいたのは半月も後のことでした。苦しいことばかりだった日々の遺物に未練などなく、それっきりあの日記もワープロも、私の念頭からすっかり消えていました。

このたび、同人誌『冬芽』で偶然その日記と再会し、大変驚くと共に、うれしく思いました。なぜかと申しますと、実はあの苦しかった時期のおかげで、新たな目覚めと幸せをつかんだからです。

その後の私の生活を、かいつまんでお伝えします。あの時、生徒たちから学べるように耳を傾ける姿勢に切り替えたおかげで、私の教師生活はずいぶんと建設的で若々しいものになりました。さらに意外なことに、時代が経つと共に生徒の気質にも変化が起こり、昔のように徒党を組んで教師に刃向かってくるような生徒は少なくなり、一見従順だがバラバラに孤立して心を病む生徒が増えてきました。それにつれて、大声で強圧的に命令する指導は、もはや時代遅れになり、私のような横並び型の生徒指導が推奨されるようになりました。ただし、私の出発点は、自分の心の奥底にある人恋しさからでしたが。

最初学校で生徒を見下^{みくだし}していたように、私は家では妻を見下していました。今から思えば、妻が自分よりも優れている点は幾つもあったのに、それが見えませんでした。妻には、近所の人や病気の人・困っている人と心を通わせる才覚や部屋のインテリアや庭を美しく飾る才覚、色彩のコーディネートセンス・幅広く読書を楽しむ才覚等々、優れている点がいっぱいありました。それが見えずに、私は自分の方が万事において正しいと思い込み、相手をけちょんけちょんにへこませて、言うことを聞かせようとした。そうしなければ良い夫婦にはなれないと思い込んでいた。本当は心の奥底で、妻を深く愛していたのに、それが見えなくなってしまうていた。モラハラ亭主というんでしょうか。

自分の誤りに気づいたのは、ある日妖精の教室で、自分のロッカーの向こうの世界を覗いた時でした。それは劇的な光景でした。暗い部屋の真ん中で、妻が10歳くらいの少女の姿で、向こうを向いて座ってシクシクと泣いてい

るのです。暗がりの中で、少女にだけ薄明るい光が当たっていました。少女は綿入れの半纏を着て座り、とても悲しそうに息を殺して泣いていました。それを見て私は、可哀想で可哀想で胸が締め付けられました。その時私の心のはっきりと、『自分はこの少女を守らなければならない』と叫びました。その深い思いに比べたら、妻との日常のいさかいなど、取るに足りない浅いものだと気付いたのです。私はその光景のことを妻に話し、自分が彼女を深く愛し・大切に思っていることを伝えました。自分が独善的であったことを詫言いました。

妻と子供とは、今も別居はしていますが、だんだん良い関係で行き来ができるようになりました。今では土日に家族一緒に食事をしています。時には家族で旅行もします。来年の夏休みには夫婦でフランスを旅行する計画です。この調子で、良い関係を築いていけたらと思っています。

教師としても、新たな展開がありました。自分が教育研究会で発表した実践報告「自らの変容を促す生徒相談」をきっかけに、同じ関心を持つ教師達との連携が生まれ、共同研究をしています。また、勤務を続けながら放送大学の大学院で教育心理学を専攻し、修士論文を執筆中です。

そしてつい先日、妖精の教室で思わぬ展開がありました。三月中ごろのこと、ノエルとラルゴが準備室の私のデスクに花束を持ってやって来ました。二人は三月末をもって妖精の教室を卒業すると報告に来たのです。妖精の教室で学んだおかげで、自信を回復し力をつけ、翌月から現実界の教室に戻るようになったというのです。そういえば以前にノエルが、妖精の教室は学校に行きたくても行けない生徒や教師の情念が生きる場所だと言っていたことを思い出しました。そしてノエルは更に、この私にも、その卒業の時期がやって来たことを告げたのです：

『只埜先生も、もうご立派に現実界の高校で活躍されているので、僕たちと一緒にここを卒業になります。』

そう言うと、二人は私に庭の花々でつくった大きな花束を渡してくれました。私はそれを受取り、しばらく茫然としてしまいました。三月三十一日、ノエルとラルゴの卒業を見送り、まだ妖精の教室で学ぶアミュをはじめ数名の生徒に見送られ、私は妖精の教室を後にしたのです。同時に現実の学校も、

人事異動で隣の市の商業高校に移りました。今ではもう、あの学校を訪れて校舎に入ることはできません。

振り返ると、自分を独善的な人間観から脱皮させてくれたのは、私の独善に必死で反発した妻と、そのおかげで味わった淋しさ、その淋しさの中で私につきあってくれた生徒たちでした。そしてあの暗い苦しい時期に、ヤケにならずに心の平静を保てたのは、妖精の教室があったおかげでした。そこに行くと、私はすなおな自分に立ち返ることができました。

7.最後に、妖精たちと

只埜氏の手紙はそれから、私が彼の日記を物語に書いて残したことへの礼と、今後の創作活動への激励、しめくくりの挨拶で終わっていました。

手紙を読み終えて少々疲れを覚え、紅茶を入れてひと休みしながら目を閉じました。Y先生（只埜氏）が仕事と家庭の危機の中を這うようにして、深い境地にたどり着くまでの道のりが目に浮かびました。「よかったね、Yさん、危機の中で、よくぞやわらかい心を失わなかったものだ。」

「心の自由」という彼の言葉が私の胸に心地よく残りました。抑圧的体制に追い詰められた時や、全ての生徒が敵に思えた時、妻を屈服させなければという観念に囚われた時、Yさんは心の自由を失っていた。あの妖精の教室に入って鎧を脱いだおかげで、彼は心の奥底の気持ち--教職を愛する心、生徒に寄り添う心、妻を愛する心--を見出したのです。

そういえば私にも、超自然的な働きのような気配が、感じられるような気がします。彼らを妖精と呼べば呼べないこともありません。これから私を待ち受ける人生にも、話し相手が妖精しかいなくなる時が、来るかもしれません。

（おわり）